

市民社會の本質とアダム・スミスの經濟思想

加藤 由治 郎

この論文はもと西洋社会思想史の一環として考察されたものである。それは近代社会思想史の一つの問題であつて、西洋の近代社会を市民社会として把握するに共に、この市民社会の本質が、アダム・スミスの經濟学説に於て思想的に表現せられている事を論究するものである。⁽¹⁾従つて本論は二つの段階に分けて論ぜられる。第一は近代社会の歴史的研究であつて、近代社会が市民社会として成立する過程を歴史的に研究する事によつて、市民社会の本質及び構造を理解せんとするものである。第二はアダム・スミスの社会思想史的研究であつて、彼の經濟学説を市民社会の理論として検討する事によつて、市民社会の本質が、スミスの經濟思想に於て如何に表現せられているかを明かにせんとするものである。

註(1)こゝで本論の意図及び課題を明瞭にする爲、社会思想史が如何なるものであるかについて簡単に述べる豫定であつたが、紙面の制限の故に省略する。それについては拙著「社会思想史—方法と研究—」を参照されたい。

A 市民社会の成立とその本質

近代社会の成立を歴史的に研究するには、先づ中世より近代への推移を、社会生活に於て考察せねばならない。中世社会が封建社会と呼ばれるのに対して、近代社会は市民社会と言はれるが、それは近代社会が独立な個人、即ち自由な市民を構成員とする社会であるからである。封建社会は有機体的な共同社会であつて、その成員は生活の一切をあげて社会全体の中に吸収されている。この基本的構造は、農村に於ても都市に於ても何等異るところはなかつた。故に中世に於ては、社会に対して自己の存在を主張する独立の個人は存在しない。全体は部分に優越し、個人はたゞ全体の中に於てのみ存在した。然るに近代の市民社会は、それ自身独立な個人を単位として構成せられた原子論的社会である。こゝでは個人が社会よりも根源的であり、社会は個人を要素として形成される。故に市民社会が成立するには、独立な個人の存在という事が不可欠な前提である。然らばこの様な個人は如何にして確立されたか。この場合直ちに思い起されるのはルネッサンスの運動である。西洋の近代はルネッサンスより始まるといわれる。ルネッサンスとは、古典文化の復興より出発し、十五世紀頃全歐的となつた精神運動であつて、人間精神を中世的束縛より解放し、人間性の再生、個人の自覚の上に、新しい世界を創造せんとする運動である。個人の確立にとつて、ルネッサンスが重要な意義を有する事はいうまでもない。しかしこの精神運動は、社会生活に於ける変動との関連を離れては理解する事が出来ないばかりではなく、歴史の転換を社会生活に於て見、個人の確立を市民社会の前提とする我々にとつて、社会生活に於ける変動を通じて、人間が個人として確立されたという事が最も重要である。それでは社会生活の変動に於て、如何にして個人が確立されたか。

中世より近世への推移を社会生活に於て見る時、それは経済生活の発展に起因する中世社会機構の漸次的崩壊と、

それによつて封建的束縛より解放された個人の確立の道程であると言へる。この場合主導的役割をなしたのは、都市の商人の手に蓄積された商業資本の発展である。即ち商業資本の発展が、封建社会の根底を破壊する新しい力として働き、人々を中世的束縛より解放して、自由な個人として現れしめたのである。而してこの解放の過程は、農村と都市の両方に於て行われたのである。

先づ第一に商業資本の発展は、貨幣經濟を一般化した。貨幣經濟の農村への浸潤は、自然經濟の上に立つ莊園の社会關係を根本的に変質せしめた。莊園に於ける農民の負担は貢納と賦役であり、前者は主として現物貢納であつたが、貨幣經濟の普及は、これ等の義務を貨幣形態による給付に變らしめた。この金錢代納制が發達すると共に、農民は封建的束縛より解放されて自由な小作人となつたが、特に賦役が貨幣に換算された結果、農民の隸屬的地位が解消し、彼等は人格的自由を獲得したのである。第二に商業資本の発展は、都市に於けるギルドの秩序を根底から動搖せしめた。元來ギルドは、外部に対しては排他的独占的強制を行い、内部に於ては嚴格な統制と規律を以て、組合員の一切の生活を束縛する事によつて、共同体的秩序を確保して来たが、今や外部にあつては、商業資本に支持されて、農村及び都市に家内工業が勃興し、内部にあつては、職人が親方に対抗して自己の利益を主張し、ギルドの統制を破壊した。かくてギルドが内部的及び外部的原因から没落すると共に、人々はギルド的強制から解放され、都市の手工業者達は自由な個人となつたのである。かくの如く農村では莊園が崩壊し、都市ではギルドが没落する事によつて、農民及び手工業者達が自由な個人となつたが、これは彼等が自発的に自らの自由を闘ひ取つたといふよりも、むしろ根本的には新しい力、即ち商業資本の發達が、封建社会の根底を揺り動かす事によつて生ぜしめた結果に外ならない。

この場合商業資本の担ひ手である商人が、封建的束縛より自己を解放した事は勿論である。といふよりも商人は社会生活の転換期に於ける最初の自由な人間であり、農村及び都市に於ける個人の発見乃至確立は、商人自身の封建制度よりの自己解放に導かれて遂行されたのである。

以上に於て我々は、中世より近世への転換を社会生活に於て見、商業資本の発展に基いて、農民及び手工業者が商人と共に封建的束縛より解放され、自由な個人となつた過程を明かにした。而してかゝる個人の確立は、人間の発見乃至個人の自覚を本質とするルネッサンス一般の運動と関連する事によつてなしとげられたのである。この事はルネッサンスの運動が最初に起つたのが、商業資本の最も発達したイタリアに於てであり、而もこの地のヒューマニスト達が、概ね商人の出であつたことからも理解される。人間は今や自己を独立な個人として自覚し、自己の責任と自由に於て行動する。彼等は社会全体の為に存在するのではなく、自己自身のために存在する。人間の持つところの価値は、彼等の外部或はその上にある社会を通してではなく、彼等自身の中に見出される。かくて近代の人間は、自由な個人として確立されたのである。而して近代の市民社会は、かゝる自由な個人を構成員として形成された社会である。従つて個人の存在は市民社会の成立にとつて不可欠な要件である。しかし個人が確立されただけでは、未だ市民社会は成立しない。市民社会が成立するには、歴史は尙一つの段階を経なければならぬ。それは封建社会に代る近代国家の成立であり、そして市民社会は、この近代国家に対するものとして、近代国家との関係を通じて形成されたのである。

二

中世より近代への転換を政治的に見ると、それは封建制度の没落と、近代国家の成立の過程に外ならない。近代国家とは国王の権力によつて統一された中央集権的国家である。中世に於て多数の領主に分割されていた国家権力が国王の手に恢復され、主権が中央に集中されるによつて、近代国家が成立したのである。近代国家が成立するには、先づ領主の権力が克服されねばならない。この為に国王は新しく抬頭した市民勢力と提携し、特に大商人の財力に支持されて自己の勢力を伸張したが、後者も自己の経済的利益のために国王に協力して国家の統一を促進した。かくて国王の政治的勢力と市民の経済的勢力とが結合するによつて、領主の権力は克服され、既に崩壊しつつあつた封建制度はこゝに没落して、近代国家が成立したのである。この時代即ち十七八世紀の国家は、国王の絶対的権力の下に立ち、主権の独立性と絶対性を強張したから、絶対主義国家或は絶対王制といはれる。絶対主義国家が強力な支配を行ふ為には官僚組織と常備軍とを必要とするが、それを維持するには財政的基礎を強固にせねばならない。そこで各国は重商主義政策を行つて貨幣の増加を計つたが、この政策は同時に商人の利益と合致するものであつた。

絶対主義国家は封建制度の没落の後に現れた新しい政治形態であるが、そこには中世的、封建的なものが保存されてゐた。国家は封建領主から政治的権力を奪つたが、彼等は貴族としての身分を失う事なく、国王に依存して宮廷貴族となると共に、地主として農民より地代を徴収した。他方近代国家の成立に協力し、豊富な財力を以て国家の財政を支持した商人は、王権の下に種々の特権を与へられ、或はその財力によつて重要な官職につき、次第に貴族化して封建貴族と利害を共にする様になつた。かくて絶対主義国家は、封建貴族を残存せしめたばかりでなく、市民の先頭に立つてゐた商人を、貴族化し封建化したのである。絶対主義国家に於ては、国王の権力は絶対的であり、人民はた

と服従する義務をもつだけである。封建社会の束縛より解放されて自由な個人となつた市民は、今や国家の成員として絶対王政の支配に服さねばならない。然るに絶対王政は、古い勢力と新しい勢力との一時的均衡の上に成立した過渡的状态であり、従つてその均衡が破れると共に、やがて崩壊せざるを得なかつたのである。

絶対主義国家は、古い政治的勢力と新しい経済的勢力との均衡に於て成立した社会形態である。前者を代表するのは国王及び貴族であり、後者を代表するのは市民である。この場合市民の中心となつたのは、既に貴族化し封建化して経済生活より遊離した商人ではなく、却つて手工業者或は農民の中から、資本を蓄積して工業家となつた所の中産生者である。この二つの勢力の均衡関係は、一方が蔽ふものとして、他方が蔽はれるものとして存在してゐた。即ち前者は後者を支配しつゝその経済的活動によつて支えられ、後者は前者の庇護の下に自己の力を育成した。古い勢力と新しい勢力とがかゝる関係にある間は、国家が社会生活の唯一の形態であり、社会は国家の中に包まれてゐた。しかしこの均衡関係は、市民の経済生活が発展するにつれて破綻するに至つた。古い勢力に蔽はれつゝ自己の成長に努めて来た新しい勢力は、もはや後者の庇護を必要としない迄に發展する。市民の経済生活は、国家の統制を耐え難い極點と感じ、その否定とそれからの解放を要求する。こゝに於て市民革命が起り、絶対王制は崩壊して、立憲政治に基く国家が成立したが、それと同時に久しく国家の中に包まれてゐた社会が国家より独立し、市民社会として自己を形成するに至つたのである。⁽¹⁾かくして絶対主義国家への対立とそれからの解放を通じて成立した近代社会は、市民を構成要素とする市民社会であると共に、それは経済生活を固有の領域とする経済社会であつたのである。市民社会は社会が国家から独立するによつて成立したが、社会が独立するといふ事は、それが一つの秩序ある世界を形成する事を意味する。

市民社会は自由な個人即ち市民を構成要素とするが、社会は単に個人の集合ではなく、個人が一定の秩序に於て結合せられたものである。それでは社会の秩序はどこから与へられるか。社会が国家から独立するといふ事は、社会生活の実質的側面である経済生活が、その形式的側面である政治的統制から独立する事に外ならない。社会が国家に包まれてゐる限り、経済生活の秩序は国家の政治によつて外から与へられる。然るに社会が国家から独立する時、経済生活はそれ自身の秩序を形成するに至る。それは国家の政治によつて外から与へられた秩序ではなくて、却つて経済生活が自己の内部から生み出した自然的秩序である。そしてこの経済生活の秩序が同時に市民社会の秩序となつたのである。故に市民社会の秩序は、市民の経済生活によつて与へられたものである。ところがこの場合市民の経済生活の原動力となつたのは、商業資本ではなくて、新しく生れた産業資本である。曾て商業資本の發達は、封建社会を破壊して、自由な個人を成立せしめたが、この商業資本は、やがて絶対王制と結合し、自己を封建化して、経済生活より遊離するに至つたのである。これに反し産業資本は、農民及び手工業者の中から出た中産生産者によつて蓄積された資本であつて、最初から生産の中にその活動の基礎をもつものである。この産業資本の支配の下に、経済生活が自律的な世界にまで成長した時に、市民社会が成立したのである。商業資本の發達は自由な個人を確立したが、かゝる個人を構成員として市民社会を成立せしめたのは、産業資本の發展である。然るに産業資本がそれ自身の發展によつて市民社会を成立せしめたのは、産業革命を通じてである。フランス革命は絶対王制を打破して市民社会への道を開いたが、市民社会が確立されたのは産業革命に於てである。

註(一)この点については、清水幾太郎「市民社会」(岩波講座倫理学第二冊)を参照。

産業革命とは、十八世紀後半から十九世紀中頃までの間に、歐洲全般に亘つて起つた經濟生活の變革である。それは機械及び動力の發明に起因する産業上の變革であつて、この變革によつて、生産様式が手工業から機械工業へ、家内工業から工場工業へ轉換したのである。産業革命は先づイギリスに起つたが、それはかかる變革に対する諸條件が、この國に於て最もよく備つてゐたからである。しかしその内最も重要な事は、農民及び手工業者の中から生れた中産生産者が、自生的マニファクチュアによつて産業資本を形成してゐたという事である。産業上の變革は木綿工業から始つた。即ちハーグリーブス及びアークライトの發明を出発点とする一系列の紡績機や織機の發明に、動力としてワットの蒸氣機関が併用されるに及んで、過去の生産様式は根本的に變革され、近代的な機械工業、工場工業が行はれるやうになつた。紡績部門に起つた生産の變革は、他の織維部門に及び、更に鉄工業や石炭工業の領域に拡大された。この工業革命と共に、汽船汽車の發明による交通運輸の變革が起り、又農村に於ては、農業機械や化学肥料の發明によつて、農業革命が現れたが、後の二つの革命は、先の工業革命を一層促進したのである。イギリスに於て典型的展開を遂げた産業革命は、半世紀程遅れて大陸の諸國にも起り、十九世紀の中頃には、全歐洲に近代的産業が普及したのである。

産業革命は機械及び動力の發明に基く産業上の變革であるが、しかしそれは単に技術上及び産業上の變革に止らず、同時に經濟及び社会の變革であつたのである。産業革命によつて、機械生産、工場生産が一般的となり、生産力は著しく増大した。こゝに於て經濟組織は根本的に變革され、商業に代つて産業が經濟生活の基盤となつた。即ち産

業革命によつて経済生活は産業化され、生産を基調とする経済機構、即ち生産力の体系となつたのである。然るに産業革命は、産業資本の発展によつて起つたものである。産業資本は中産生産者によつて形成された資本であつて、その活動の基礎を生産力にもつものであるが、この産業資本の発展なくしては、機械や動力の使用も、生産様式の交革も起り得なかつたのである。而して産業革命の結果産業資本が更に発展すると共に、この交革を通じて産業資本の全き支配が現れたのである。それは産業革命によつて経済生活が生産化され、生産力の体系として産業資本の支配の下に立つに至つたからである。産業資本は生産要素を結合して生産を行ふが、その生産物は商品として市場で販売されるから、産業資本は生産過程のみならず、流通過程をも支配する。即ち一切の経済生活は産業資本の支配の下に行はれるのである。この様に産業資本によつて支配される経済体制が資本主義経済に外ならない。産業革命は、産業資本の支配を通じて、資本主義経済を成立せしめたのである。併し資本主義は単に経済体制であるばかりでなく、それは同時に社会体制である。市民社会が成立したのは、経済生活が独立の世界として自己を形成するによつてあるが、経済生活が独立の領域として形成されたのは産業革命に於てある。而して産業革命によつて経済生活が生産力の体系として形成されたのであるから、市民社会は生産力の体系として把握される。ところが生産力の体系は、産業資本の支配の下に立つから、市民社会は産業資本の支配する社会、即ち資本主義社会として成立したのである。市民社会は経済を固有の領域とする経済社会であるが、それは産業社会であり、産業資本の支配の下に立つ経済社会、即ち資本主義社会であつたのである。

以上に於て我々は、近代市民社会の成立の過程について述べたが、それによつて市民社会の本質的構造を理解することが出来る。市民社会は、封建社会より解放された自由な市民、即ち独立な個人を構成員とする社会である。それは封建社会の如く個人の一切を吸収する全体的な共同社会ではなく、個人の独立と自由を前提し、かゝる個人を単位として構成せられた原子論的社会である。市民社会に於て、個人は自主的主体であり、行為の基準を自己自らの中にもつてゐる。そして社会は個人の自由を束縛するのではなく、却つて個人の自由な活動によつて形成されるのである。こゝから個人主義或は自由主義が市民社会の第一の特徴としてあげられる。併し市民社会は単に個人の集合ではない。市民社会は個人を成員とするが、それが社会として存立するにはそれ自身の秩序をもたなければならない。而して市民社会の秩序は、市民個有の領域である経済生活の中に形成される。即ち市民社会は経済社会として、絶対主義国家への対立とそれからの解放を通じて成立したのである。この場合市民社会を成立せしめた決定的要因は、生産産者に於て發展した産業資本である。産業資本の支配の下に、経済生活が生産力の体系として秩序づけられるに より、市民社会が成立したのである。産業資本の支配する社会は資本主義社会である。市民社会はかゝる資本主義、社会として成立したのである。故に資本主義が市民社会の第二の特徴としてあげられるのである。

かくの如く市民社会は、第一に個人主義社会或は自由主義社会として、第二に資本主義社会として特色づけられる。個人主義乃至自由主義は、近代の市民社会を中世の封建社会より區別する根本的特徴であるが、それは同時に社会そのものゝ構造を規定する意味に於て、市民社会の本質的契機である。尤も個人主義は、古代のヘレニズム及びローマの社会にも見出される。しかし古代に於ける個人主義は、逃避的、消極的であり、或は沒社会的、反社会的であ

つて、社会構成の原理とならないものである。これに反し近代の個人主義は、ルネッサンスの精神運動と関連して確立され、合理主義、科学主義と結合して、新しい社会の積極的原理となつたのである。市民社会が資本主義社会であるのは、それが経済社会として、産業資本の発展に於て形成されたからである。資本主義は古代のローマ社会にも中世社会にも存在したといはれるが、この場合の資本主義は、営利即ち利潤追求を唯一の目的とする商業資本の支配に外ならない。この意味の資本主義は、古き社会の経済生活に現れた一つの現象であつて、社会を成立せしめる構成的要因となつたものではない。これに反し近代の資本主義は、その営利が生産力の拡充と内面的に結合する産業資本の支配であり、その全き姿は産業革命の経過の中に現れたのである。この意味の資本主義は、近代社会を成立せしめる決定的要因となつたものであつて、経済生活が産業資本の支配の下に生産力の体系として秩序づけられるにより、市民社会が成立したのである。

近代の資本主義は古き資本主義と原理的に異なるものであるが、両者は歴史的にもその起因を同じくしない。この点を力説するのは大塚久雄氏である。それによると近代資本主義は、商業資本の発達即ち経済生活の商業化と共に、商業資本が産業部門に浸潤し、遂にこれを支配した時に成立したのではなく、却つて商業資本に対抗しつゝ、中産生産者の中に蓄積せられた産業資本が、産業革命を通じて経済生活を支配するに至つた時に成立したものである。従つて近代の資本主義は営利を終局の目的とするものではなく、営利はつねに生産力と結びついてゐる。むしろ営利は生産の結果或は手段であつて、生産力の拡充のために営利が制限せられる事もあるのである。⁽¹⁾ 同氏は又資本主義の精神に関するマックス・ウェーバーの説を援用して、次の如く述べてゐる。資本主義の精神は、商人の営利欲、利潤

追求の欲求の中に存するのではなく、却つてプロテスタントの禁欲的倫理の中に見出されるのである。何故なれば、単なる營利心は、生産力より遊離するのみならず、むしろこれを阻害するものであるに反し、勤勞、質素、節約等の禁欲的エトスは、生産力を拡充するものである、と。³² 今この問題に立入る暇はないが、禁欲的倫理は消極的であつて、資本主義精神の積極的原理となる事は出来ない。それは生産力の準備となるが、生産力そのものを生み出すものではない。資本主義の精神は、生産の欲求、価値創造の意欲の中に見出されねばならない。それは生産の倫理、価値創造の倫理から生れるものである。近代の人間は物を作る人間、即ち工作人、或は制作者であるといはれるが、このポイエシスの精神が、産業資本の發展を通じて経済生活に現れたのが、資本主義精神に外ならない。そしてかゝるポイエシスの精神、価値創造の精神を根底とするにより、資本主義は近代市民社会の構成的原理となつたのである。

註(1) 大塚久雄「近代資本主義の系譜」

(2) M. Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus.

B アダム・スミスの經濟思想

五

アダム・スミスは「経済学の父」といはれるが、それは彼が一七七六年にその著「国富論」を公にしたことによつて、経済学が独立の科学として認められるに至つたからである。経済学が独立の科学として認められたという事は、その対象である経済生活が独立の領域として把握された事を意味する。ところが市民の経済生活が、国家から離れて

それ自身の秩序をもつ世界として見出されるによつて、市民社会が成立したのであるから、アダム・スミスの経済学説は、同時に市民社会の理論であつたのである。⁽¹⁾そこで我々は、近代社会思想をアダム・スミスの経済思想に於て考へ、市民社会の本質が、彼の経済学説に於て如何に表現せられてゐるかを究明しようと思ふ。

アダム・スミスの経済思想を理解するに當つて最も重要な事は、彼が経済学者であつたと同時に、哲学者であり、倫理学者であつたといふ事である。彼がグラスゴー大学で最初に講議したのは論理学であり、続いて道德哲学の講議を長く担当した。スミスの著書としては、第一に「国富論」が、次に「道德情操論」があげられるが、この両者は何れも彼が道德哲学講議の中で論じた問題を後に発展したものである。故にスミスの経済思想は「国富論」の前に、既に道德哲学講議の中で述べられてゐる。そこでは経済学の問題が、哲学的立場から、他の學問との関連に於て論ぜられたのである。

アダム・スミスがグラスゴー大学で講じた道德哲学は四つの部門からなつてゐる。第一の部門は自然神学であり、第二の部門は狹義の倫理学である。第三及び第四の部門は法律学講議として一括されたが、前者は正義の原則に関するものとして個々の法律学であり、後者は便宜の原則に基き一国の富及び繁栄について論ずるものとして経済学である。故にスミスの道德哲学は、単なる道德論ではなく、それは倫理学の外に、神学、法律学、経済学を包括する學問の体系である。そして彼は道德哲学を自然哲学に対立せしめたから、道德哲学の体系は、精神科学或は社会科学の体系に外ならない。而してこの体系の中の倫理学及び経済学に関する問題が、後に独立の主題として展開されて、「道德情操論」及び「国富論」となつたのである。⁽²⁾スミスの経済思想は「国富論」に於て完成されてゐる。然るに我

々が、彼の經濟思想の研究を道德哲學から始めるのは、それによつて彼の經濟學が、學問全体の体系の中に占める位置を明らかにすると共に、彼の經濟思想の發展の過程を見ようと思ふからである。

註(一) 高善善哉「アダム・スミスの市民社会体系」この書はアダム・スミスの經濟理論を、市民社会の理論として捉へ、それを生産力の体系として論じてゐる。

(2) D. Stewart, Account of the Libe and Writings of A. Smith, Pp. XV-Viii.

六

アダム・スミスの道德哲學は四つの部門に分れてゐるが、この四つの部門は、夫々獨立の領域をなすと共に、相互に関連して學問の体系を構成してゐる。彼は先づ三つの世界即ち道德的世界と法律的世界と經濟的世界とを區別すると共に、これ等を一つの神學的世界によつて統一した。彼によれば、世界は全智全能の神によつて創造され、神の立てた法則即ち自然的秩序に従つて運行する。而して神はその目的を達する為に、人間に利己心と仁愛との性情を賦与し、且つこれ等の感情の發動を適宜ならしめる為に同感の能力を与へた。故に人間がその自然の性情に従つて行動する時、自ら世界の秩序に合致し、神の予定調和を実現するのである。この様な自然法的或は理神論的世界觀が、彼の學問体系の根本的前提である。そして夫々の世界に於て自然的秩序を發見するところに、科學の目的が存するのである。然らばかゝる自然的秩序は、經濟的世界に於て如何なるものとして見出されるか。

アダム・スミスの体系に於て、經濟的世界はもと法及び統治の世界の一部としてその中に包括されてゐた。法律的

世界は正義の原則に従ふ世界であるが、正義は仁愛と共に徳性の一つであるから、法律的世界は道德的世界の中に含まれる。かくて経済的世界は、法律的世界を媒介として、道德的世界に結びついてゐる。然るにスミスによれば、正義は嚴密正確な法則として他の徳性より區別されるから、法律的世界は、道德的世界より分離して、独立の科学即ち法律学の対象となる。同様に経済的世界は、便宜の原則に基く世界として、正義の原則の支配する法律的世界から區別せられ、それ自身独立の世界を形成して経済学の対象となるのである。便宜の原則に基く世界とは、義務や強制の存しない世界、即ち各人の利己心の発動に任せられる世界である。経済的世界は便宜の原則に基く世界であり、個人の利己心の由自にして自然的な発動に任せられる世界である。こゝでは人間は利己的存在であり、利己心或は自愛心が、人間の天性であり自然性である。然るに各人が、その自然の性情に従つて専ら自己の利益の為に活動する時、自ら自然の秩序に合致し、一つの秩序ある経済的世界が成立するのである。かくして経済的世界が、法及び統治の世界から分離し、それ自身の秩序をもつ独立の世界として形成せられたのが市民社会に外ならない。市民社会は国家や法の規制より自由な世界であるが、それが経済社会として存立するには、一定の経済的秩序をもたねばならない。そしてこの秩序は、個人の自由な活動が自然的秩序と一致するによつて成立するのである。

かくの如くアダム・スミスは、道德哲学講義に於て、経済的世界を他の世界より區別し、それを自由な市民の経済社会即ち市民社会として把握した。彼の「国富論」はかゝる市民社会を分析して、その基本的構造及び法則性を明らかにしたものである。スミスの経済思想は「国富論」に於て完成されたが、その根本思想は道德哲学講義の中で述べられてゐる。それは個人の利己心を根底とする経済的自由主義と、個人の自由な活動が全体の秩序に一致するといふ自

然的秩序の思想である。この根本思想は市民社会を支へる二つの柱として「国富論」の指導理念となつたのである。然るに講義と「国富論」との間には十数年の隔たりがあり、この間にイギリスの産業革命はその緒につき、スミスはフランスに渡つて重農学派の影響を受けた事を見逃してはならない。講義に於ては、経済学は法律学の一部として取扱はれたばかりでなく、それは形而上学的、神学的思想の支配の下に立つてゐる。即ちスミスは、人間の利己心を自然的事実として認めながら、それを神が人間に賦与した性情と解し、人間がこの自然の性情に従つて自由に活動する時、神の予定調和である自然的秩序に合致すると説いてゐる。「国富論」は経済的世界を他の領域より切離しそれを自律的世界として取扱つてゐるが、この書によつて経済学が独立の科学として成立したと言はれるのは、スミスが「国富論」に於て経済思想を形而上学的、神学的思想より解放し、現実の理論的考察に基いて、それを学問的体系に組織したからである。そこで我々はアダム・スミスの経済思想を「国富論」について考察すると共に、経済的自由及び自然的秩序の思想が、この書の中で如何に経済学の原理として理論的に確立されたかを究明しようと思ふ。

七

「国富論」はその書名が示す如く「諸国民の富の性質及び諸原因に関する研究」を主題としてゐる。この書の内容は五つの編から成つてゐる。第一編は主として分業、価値、価格及び分配を、第二編は資本の本質及びその用途を論ずる。この両編は経済学の理論的部門に当るものである。第三編は歴史的部門であつて、諸国民に於ける富の發達について述べてゐる。第四編は経済上の主義即ち政策に関する部門であり、こゝで彼は重商主義及び重農主義を批判

し、自由放任主義を主張してゐる。第五編は財政学であり、君主又は国家の收入について論ずるものである。かくの如くスミスの経済学は理論、歴史及び政策を包括する広汎な体系であるが、そのうち最も重要なのは理論と政策の部門である。彼の経済学は、政策論を中心とし、自由放任主義を主張する為の理論であるといはれる。しかしこの政策を、経済社会の理論的考察によつて基礎づけるところに「国富論」の課題があり、そしてこの経済理論が彼をして経済学の創始者たらしめたのである。故に我々はスミスの経済思想を、「国富論」の理論的部門即ち第一及び第二編について考究せねばならない。

スミスによれば、国民の富とは「すべての生活上必要なもの及び便宜なもの」である。そしてこれ等のものは、直接その国民の労働の生産物であるか、或はその生産物を以て他の国民から購入したものである。⁽¹⁾従つて彼にとつて富の原因は労働である。しかしそれは特定種類の労働ではなく、あらゆる種類の産業に於ける労働である。ところが富の増進は労働生産力の増進に俟たねばならない。こゝに於て国富の諸原因に関する研究は、自ら労働生産力増進の原因に関する研究となる。労働生産力を増進する第一の原因は分業である。けだし分業は熟練を高め、時間を節約し、更に機械の発明を促すからである。労働生産力増進の第二の原因は、国民中有用な労働に従事する人々、即ち生産的労働者の数であるが、これを決定するものは資本の蓄積及びその用途である。而して資本の蓄積は、分業の發達にとつても必要な前提となるのである。こゝに於てスミスは、第一編の最初の三章を分業論に、そして第二編を資本論に当てたのである。この両者は生産論を構成する。生産論は労働生産力増進に関する研究である。労働生産力は、質的には分業の發達に、量的には生産的労働者の数に基くが、それ等は結局資本の蓄積に依存するのである。

労働の生産物は国民の間に分配される。この分配の秩序を論ずるのが分配論である。然るにスミスは、分配論の前提として流通論を立て、価値及び価格について論じてゐる。スミスは使用価値と交換価値とを区別したが、彼が問題としたのは商品の価値即ち交換価値である。スミスの価値論は、価値の尺度が何であるかといふ問題から出発する。彼は貨幣及び穀物が、共に価値の正確な尺度として用ひられない所以を論じた後、労働のみが正確な価値の尺度であると主張する。ところが労働が価値の尺度であるのは、労働が価値の源泉であるからである。物の価値はそれを生産する為に投下された労働量によつて定まる。この意味に於て彼は「労働は物に支拂はれる最初の代価である」といつてゐる。然るに生産物の価値がすべて労働者に帰属するのは原始社会に於てであつて、資本が蓄積され土地が所有される文明社会に於ては、商品の交換価値即ち価格は投下労働量以上であつて、価値は賃銀、利潤及び地代の三つの部分から構成せられる。故に労働が価値の唯一の源泉であるのは資本主義以前の社会であつて、資本主義社会に於ては、賃銀、利潤及び地代が価値の源泉となるのである。而してこの三者には、一地方もしくは一社会に於て、各々自然率即ち平均率があり、三者がその自然率に合致する時、その商品の価格を自然価格といふ。商品が現実^に売買せられる価格は市場価格である。市場価格はその時々^の需要供給の關係によつて定まるが、それはつねに自然価格を中心として旋回するのである。かくの如く各商品の価格が、賃銀、利潤及び地代に分解せられるから、一切商品の価格の合成である国民の富も、同様に三つの部分に分解せられ、労働者、資本家及び地主の三階級の間^に分配せられる。分配論はこれ等の三要素を自然的に決定し、変動せしめる原因を研究するものである。かくて第一編の四章以下は分配論に当てられたが、それは狭義の分配論の外に、流通論即ち価値論及び価格論を含んでゐるのである。

註(一) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, Vol. 1, P. 1.

(二) A. Smith, *ibid.*, P. 38.

八

アダム・スミスの経済理論は、生産論と分配論とから成つてゐる。そして前者は分業論と資本論とに分れ、後者は価値論、価格論及び狭義の分配論から成つてゐる。この経済理論に於て、経済的自由と自然的秩序の原理が如何に確立されたかを究明するのが我々の問題である。この問題を解決する事によつて、経済学が「国富論」に於て独立の科学として成立した所以を明らかにすると同時に、市民社会の本質が、アダム・スミスの経済学説に於て思想的に表現せられてゐる事を理解することが出来るであらう。

経済的自由の原理とは、経済活動の根源を、個人の利己心或は自愛心に認める思想である。スミスの経済理論は、この原理によつて貫かれ、生産論も分配論もすべて利己心を根底として説かれてゐる。先づ生産論についていへば、分業は人間が一物を他物と交換する性向より生れるものであるが、この性向は利己心或は自愛心に基いてゐる。人々が交換及び分業を行ふのは、それによつて彼等が相互に自己の利己心を満足せしめるからである。分業に伴ふ機械の發明や利用も、利己心を原動力としてゐる。他方資本の蓄積は節約によるが、節約は利己心に基く本能である。そして人の利己心が自由に発動せしめられる時、資本は最も有利な用途即ち生産的労働者の雇傭に向けられるのである。分業論は交換論を前提する。交換の場所をスミスは商業社会として捉へた。商業社会とは、商品が交換され、各人があ

る程度商人となつてゐる社会である。こゝでは各人が利己心に導かれて交換を行ふ事が、社会全体の利益となるのである。³ 価格論の中心は自然価格であるが、自然価格を決定するのは個人の利己心である。即ち各人の利己心が自由に放任せられる時、市場価格は自由競争によつて自然価格に一致するのである。⁴ 価格を構成する三つの部門は、賃銀、利潤及び地代として社会の各層に分配せられる。この場合これらの所得は何れも利己心に基いて形成され変動するのである。⁵ かくしてスミスは一切の経済行為を利己心を基礎として説明し、各個人が利己心に従つて自己の利益のために活動する時、生産力は増大し、富の分配は公平に行はれて、社会全体の利益が増加すると論じてゐる。而して彼はこの原理に基く経済上の主張を自由放任主義と呼び、その政策論に於て、重商主義及び重農主義を批判して、自由放任主義を唱へたのである。

経済的自由の原理はアダム・スミスの経済学の根本的原理である。彼はこの原理の上に経済理論を立て、一切の経済行為を個人の自由、即ち利己心から説明したのである。この意味に於てスミスの経済学は、個人主義経済学或は自由主義経済学といはれる。スミスの経済学が、個人の自由を第一要件としたのは、彼が経済社会を、自由な個人を構成員とする市民社会として把握したからである。市民社会は個人の自由を前提とするのみならず、それは個人の自由な活動、即ち利己心の自由な発動によつてのみ発達する。かくてスミスは、絶対主義国家の重商主義政策に反対し、自由放任主義を唱へたのである。併し市民社会は個人を成員とするが、それは単に個人の集合ではなく、個人が一定の秩序に於て結合せられたものである。市民社会が社会として存立するにはそれ自らの秩序をもねねばならない。それは経済生活に於ける秩序、即ち経済的秩序である。この経済的秩序は、道德哲学の中では自然的秩序として語ら

れてゐる。そして自然的秩序はつねに利己心と関連して説かれる。人間は経済生活に於て、利己心に基いて行動するが、それは自ら自然的秩序と合致し、個人の利益が同時に社会の利益となる。ところが自然的秩序は、最初から神学的予想の下に立ち、神の予定調和として説かれてゐる。そしてこの神学的思想は、「国富論」の中でも「見えざる手」として現はれてゐる。⁽⁶⁾ 然るに「国富論」に於てスミスが経済学の創始者となつたのは、彼がこの書に於て自然的秩序を神学的思想より解放し、それを純粋な経済的秩序として確立すると共に、この経済的秩序を基礎として、現実の経済生活を理論的体系に組織したからである。然らばかゝる経済的秩序をスミスは如何なるものとして把握し、それによつて経済学を如何に体系づけたか。

註 (1) A. Smith, *ibid.*, p. 15

(2) A. Smith, *ibid.*, p. 323, 334.

(3) A. Smith, *ibid.*, p. 24.

(4) A. Smith, *ibid.*, pp. 59-60

(5) A. Smith, *ibid.*, p. 50, 101, 145.

(6) A. Smith, *ibid.*, p. 421.

九

「国富論」の第一編及び第二編は、アダム・スミスの経済理論である。それは生産論と分配論とに分れるが、その中心となるのは生産論である。「国富論」は国富の性質及び原因の研究であるが、富は労働の生産物であるから、勞

働生産力の増進の原因を研究する生産論が中心の課題となる。この意味に於て「国富論」は「生産の福音書」といはれる。而して分配は、生産物が分配せられる過程として、生産論の見地から考察されてゐる。他方スミスは、分配の問題を流通の問題として考へ、価値及び価格について論じてゐる。こゝで彼は市民社会を、各人が交換を通じて商人となるところの商業社会として規定してゐる。しかしスミスにとつて、流通は生産力の媒介の過程に外ならない。流通論は自然価格論に於て分配論に移る。分配の問題は単に流通の問題に止らず、それは根本に於て生産及び生産力の問題である。社会的生産物は、賃銀、利潤及び地代として社会の各層に分配せられるが、それは労働、資本及び土地が、生産の三要素として、生産力の体系を構成するからである。こゝに於て市民社会は、単なる商人の社会即ち商業社会ではなくて、それは生産者の社会即ち産業社会である。スミスにとつて社会は何よりも富を生産する社会であつて、単に富を分配する社会ではなく、又単に富が流通する社会でもない。かくてスミスは、経済社会を生産力の体系として把握したのである。彼は生産力を労働生産力と規定したが、労働の生産力を増進せしめる究極の原因は、資本の蓄積とその用途である。労働生産力は、質的には分業によつて、量的には生産的労働者の数によつて増進せしめられるが、この両者は結局資本に依存してゐる。資本が生産の為に投下せられるにより、分業や機械の利用も可能となり、多数の労働者が生産に動員されて、社会の生産力が増進されるのである。⁽²⁾

以上の事は、スミスに於ける価値論の展開からも理解される。労働が価値の唯一の源泉であり価値の尺度であるのは、資本主義以前の原始社会に於てよあつて、資本の蓄積と土地の私有が発生した後の資本主義社会に於ては、交換価値即ち価格は、賃銀、利潤及び地代に分解され、資本及び土地が労働と並んで価値の源泉となるのである

(3) スミスにとつて、価値は流通概念であるよりも、むしろ生産概念である。生産とは単に物の生産ではなくて、物の価値の生産である。こゝから彼は価値を生産する労働を生産的労働と呼んでゐる。(4) しかし価値を生産するのは労働のみではない。生産が価値の生産であるにより、価値論は直接生産論と結合し、価値の源泉である労働、資本及び土地が、同時に生産の要素となるのである。

然るにこの生産要素の中で、特殊の位置を占めるのは資本である。スミスによれば、資本とは収入を生む資材であるが、その収入は、資本を生産に投ずるによつて獲得せられる利得即ち利潤である。そこで彼は生産に投下される資本を単なる利附資本より區別し、後者による収入即ち利子は利潤の一部に過ぎないとしたのである。(5) この利潤を目的とする資本は、単に生産要素の一つではなくて、それ自身生産の担ひ手となり、その指導者となるものである。資本は他の生産要素を結合し、自己の責任と計算とに於て社会的生産を行ふ。近代社会に於ては、一切の生産はかゝる資本の支配の下に行はれる。而して資本は労働の生産力を増進せしめるばかりでなく、労働及び土地が生産力を發揮するのは、資本が生産に投下せられるによつてである。この意味に於て、資本は生産力の根源である。スミスは原始社会と近代社会とを比較し、前者に於ては殆んどすべての成員が何等かの労働に従事するにかゝはらず、社会はつねに貧困であるが、後者に於ては労働しない人間が多数存在するにかゝはらず、社会全体の富は大であると述べてゐるが、これは原始社会に於ては、労働のみが生産力の源泉であるに反し、近代社会に於ては、資本が生産力の根源となり、それによつて労働の生産力が増進するからである。かくて資本は生産力の根源であるが、生産力の根源となる資本は、生産の為に投ぜられた資本即ち産業資本である。スミスは資本を最初から生産力との關係に於て論じてゐる。

る。それは生産力を増進する資本、生産力の根源となる資本である。彼にとつて資本は、産業資本であつて商業資本ではない。この産業資本の支配の下に、生産の諸要素が生産力の体系に形成されるのである。スミスは経済生活を生産力の体系として把握したが、それは産業資本の支配のもとに立つ生産力の体系、即ち生産力の資本主義的体系であつたのである。彼が経済生活の中に見出した自然的秩序即ち経済的秩序は、生産力の資本主義的体系に外ならない。而してスミスはかゝる経済的秩序を基礎として経済生活を理論的体系に組織したのであるから、彼の経済学は資本主義経済学といはれるのである。

註(一) A. Smith, *ibid.*, P. 54, 248.

(二) A. Smith, *ibid.*, P. 259.

(三) A. Smith, *ibid.*, P. 50-2.

(四) A. Smith, *ibid.*, P. 313.

(五) A. Smith, *ibid.*, P. 332.

(六) A. Smith, *ibid.*, P. 2.

十

我々はアダム・スミスの経済思想を、彼の道徳哲学講義及び「国富論」について考究したが、それによつて最初にあげた第二の課題に解答を与へる事が出来るであらう。社会思想はその社会に於て形成された文化の主要形態によつて規定されるが、近代の社会思想は主として経済生活によつて規定せられ、経済思想として現はれる。それは近代の市

民社会が経済生活を固有の領域とする経済社会であり、経済生活が自律的世界に形成されるにより市民社会が成立したからである。¹⁾ところが近代に於て経済生活を始めて統一ある世界として把握したのはアダム・スミスであるから、我々は近代社会思想の代表者をアダム・スミスに見出す事が出来る。然るに社会思想は社会そのものの思想的表現であるから、アダム・スミスを以て近代社会思想の眞の代表者とするには、彼の経済思想が市民社会の本質を如実に表現してゐる事が示されねばならない。この事は以上の論究によつて略々明らかになされたと思ふ。

アダム・スミスは近代の経済生活を、市民の経済生活、即ち市民社会として把握した。この市民社会を分析して、その本質及び構造を究明するのが彼の課題であつたのである。スミスの経済思想は先づ道德哲学講義の中で述べられてゐる。この講義に於て経済的世界が、法律的世界の中に包括されながら、便宜の原則に従ふものとして独立の界世を形成すると説かれてゐるのは、市民社会が、近代国家への対立とそれからの解放を通じて成立した過程に照応するものである。便宜の原則とは、個人の利己心が国家の統制より解放されて自由に勞動する事を認める原理である。而してスミスによれば、個人が利己心に従つて自己の利益の爲に自由に活動する時、自ら自然的秩序に合致して、経済的世界が形成される。かくて個人の利己心と自然的秩序とが、市民社会を成立せしめる二つの原理となつたのである。然るに道德哲学講義は、最初から形而上学的、神学的予想に基いてゐる。こゝでは利己心は、神が人間に賦与した本性であり、自然的秩序は、神が自ら立てた世界の秩序である。従つて利己心が自然的秩序に合致する事は、神の意思によつて定められた予定調和である。

アダム・スミスの経済思想は「国富論」によつて完成された。彼はこの書に於て、道德哲学の中で述べた経済思想

を發展すると共に、利己心及び自然的秩序の概念を、神学的思想より解放し、それを経済的原理として確立する事によつて、経済学を成立せしめたのである。スミスは個人の利己心を基礎として経済理論を立て、一切の経済行為を利己心或は自愛心から説明する事によつて、それを経済的自由の原理として確立したのである。彼が利己心を経済生活の根底としたのは、市民社会が自由な個人を成員とする经济社会であり、そして個人の本質的契機を、彼が利己心に認めたからである。こゝから彼の経済学は、自由主義乃至個人主義経済学といはれる。然るにスミスにとつて、個人は利己的存在であると同時に、生産力を担当するものである。各個人は自己の利益のために活動するが、彼等は同時に労働、資本及び土地を提供して生産力の源泉となるのである。こゝに於てスミスは、経済理論の基礎を生産論に置き、それを生産力の体系として構成したが、この体系に於て指導的要因となるのは産業資本である。産業資本は生産の為に投ぜられた資本であり、一切の生産力の根源となるものである。かくてスミスは、経済生活を産業資本の支配の下に立つ生産力の体系として把握したが、産業資本の支配する経済体制は資本主義経済である。スミスの経済学は、資本主義経済を対象とするものであり、従つて資本主義経済学といはれる。スミスが「国富論」を著したのは、いほど産業革命の前夜であつた。而も彼は市民社会が産業資本の支配の下に資本主義社会として形成される事を既に洞察してゐたのである。アダム・スミスの経済学は、第一に個人主義経済学であり、第二に資本主義経済学である。我々は先に、市民社会の根本的特徴を個人主義と資本主義の二つの点に認めたが、この市民社会の本質は、アダム・スミスの経済思想に於て如実に表現せられてゐるのである。

註 (1) 拙著「社会思想史—方法と研究—」三頁

(2) 大河内一男「経済思想史」八九頁